

博士學位論文要約

論文題目： 20世紀初頭イラクのユダヤ・コミュニティとそのアイデンティティの諸相—ユダヤ系知識人によるアラビア語誌『ミスバーフ』(1924-1929)を中心に—

氏名： 天野 優

要約：

本論文は、20世紀初頭イラクにおけるユダヤ・コミュニティとそのアイデンティティの諸相の一端を明らかにするものである。シオニズムとアラブ民族主義という二つのナショナリズムの影響下にあったイラクのユダヤ・コミュニティを多角的な視点から考察する本論文では、1924年から1929年にかけてバグダードで発行されたユダヤ系知識人によるアラビア語誌『ミスバーフ』(المصباح/המנורה)を中心に扱う。本論文は序論と結論を除き、大きく分けて二つの部分で構成されている。イラクのユダヤ・コミュニティと『ミスバーフ』が置かれていた歴史的・社会的文脈を定義する第1章と第2章、及び従来の研究を踏まえつつ『ミスバーフ』に見られる「ユダヤ」及び「アラブ」、「イラク」という性質の表象とその相互関係を分析・考察する第3章と第4章である。

序 「イスラエルのイラク系ユダヤ人」と「ディアスポラのユダヤ系イラク人」

序論では、20世紀初頭イラクのユダヤ・コミュニティをめぐる従来の研究の問題点を指摘し、本論文が取るアプローチを示した。20世紀初頭イラクのユダヤ人は、ユダヤ教/ユダヤ民族/シオニズムの狭間に置かれた「ユダヤ人/ユダヤ教徒」である一方で、アラビア語を話す「アラブ人」かつイラクという領域に生きる「イラク人」でもあり得た。イスラエル建国前のイラクに存在したユダヤ・コミュニティをどのような歴史叙述において論じるべきかという点は常に議論的となってきた。一般にアラブ民族主義の歴史叙述は共存共栄の過去を誇張する一方で、シオニストの歴史叙述は、1950年代初頭イラクのユダヤ人口の大半がイスラエルへと移住した現実を反映し、反ユダヤ主義の蔓延や迫害を強調する。

1960年代から始まるイラクのユダヤ・コミュニティに関する研究の大半は、イラク出身ユダヤ人研究者にによって主にイスラエルを拠点にヘブライ語で行われたことから、シオニストの歴史叙述の影響が色濃く見られた。しかし2000年代以降、こうした潮流に対して中東近現代史の文脈でイラクのユダヤ・コミュニティを再考する新たな研究が現れた。本論文は後者の姿勢と問題意識を共有しつつ、特にイラクのユダヤ・コミュニティに見られた自己認識や帰属意識に焦点を当てる。その際、彼らがコミュニティ内外へと自己を表象する場となったアラビア語言論空間に着目し、1920年代バグダードでユダヤ系知識人が創刊したアラビア語誌『ミスバーフ』(1924-1929年)を分析対象とした。

第1章 近現代イラクとそのユダヤ・コミュニティ―「ユダヤ教徒」から「ユダヤ人」へ

第1章は、1920年代のイラクおよびイラクのユダヤ・コミュニティを概観し、それらをめぐる複数の文化的・社会的・歴史的交錯を明示する章である。隣接しながらも独立した枠組みを保っていたアラブ世界とユダヤ世界、それぞれがイラクという領域で遂げた独自の近代化・世俗化の過程に着目し、とりわけその過程における新聞・雑誌といった定期刊行物の役割に焦点を当てる。20世紀初頭、イラク社会の変容に伴いユダヤ・コミュニティをめぐる自他の認識にも変化が起こり始めた。具体的には、「ユダヤであること」の定義が、宗教的マイノリティ「ユダヤ教徒」に限定されなくなったことに加え、「アラブ人」、「イラク人」という新たな自己認識の表明も散見されるようになった。

多種多様な宗教・宗派・民族が入り組んだイラク社会では、共存共栄への模索やナショナリズム、集合的アイデンティティへの関心が高まり、より開かれたアラビア語言論空間の成立を促した。こうした傾向は、若い世代のユダヤ系知識人にアラビア語の言論・出版に携わる機会を与えた。本論文で扱う、ユダヤ系知識人によるアラビア語誌『ミスバーフ』は、こうした社会的背景の下創刊された雑誌であった。

ユダヤ人が20世紀以降イラクのアラビア語言論空間に参入を果たした背景には、イラク社会全体の変容という外的要因に加え、パリに本部を置くユダヤ組織全イスラエル同盟 Alliance israélite universelle/ כל ישראל חברים (通称アリアンス) の教育機関などを通してユダヤ・コミュニティ内で独自の近代化・世俗化が始まったということがある。ヨーロッパのユダヤ・コミュニティとの接触により、ムスリムが多数派を占める周辺社会に比べ早い段階から宗教権威の立場に変化が生じていたことや、定期刊行物の印刷・出版の技術がインドのバグダード系ユダヤ・コミュニティから導入されたことも挙げられよう。アラブ世界の延長線上にあるイラク社会とユダヤ世界と密接な関係を維持するイラクのユダヤ・コミュニティ、双方が独立して辿った発展と変容の過程が交差する時期であった1920年代にこそ、『ミスバーフ』は成立し得たのである。

第2章 イラクのユダヤ系知識人によるアラビア語誌『ミスバーフ』

第2章では、第1章で提示した社会的・歴史的背景の下創刊された『ミスバーフ』の特徴を考察し、従来の研究における評価を検討した上で本論文の方向性を示した。『ミスバーフ』は、1924年から1929年にかけてイラクの首都バグダードで発行された、ユダヤ系知識人による本格的なアラビア語誌の嚆矢である。その表紙上部中心には「灯火」を意味する誌名がアラビア語とヘブライ語両言語で記載されている。毎週木曜日に定期的に発行したが、1926年の半ば以降廃刊となる1929年までは不定期に数号が発行されたのみである。自らを「文学的、科学的、社会的な週刊誌」と定義していたことから明らかなように、『ミスバーフ』誌面には若きユダヤ系知識人らによるアラビア語詩や短編小説に加え、当時イラクで注目を集めていたムスリムやキリスト教徒といった同世代の非ユダヤ系知識人らによる文学作品や、西洋文学からの翻訳も積極的に掲載されていた。こうした文学的な内容に加え、イラク社会が直面する社会問題とそれに関する論考や、世界各地のユダヤ・コミュニティに関するニュースも掲載されるなど、報道媒体としての性質も備えていた。

『ミスバーフ』の創刊者は、オスマン帝国末期にバグダードで生まれたユダヤ人サルマ

ーン・シーナ שלמן שינה (1899 年生-1978 年没) であった。1924 年 4 月の創刊時から 1 年程は、当時最も活躍したユダヤ系知識人の一人であったアンワル・シャーウール أنور شاورول / אנאור שאול (1904 年生-1984 年没) が編集者を務めたが、1925 年初頭以降はシーナ自身が編集を務めるようになる。シーナやシャーウールをはじめ、エズラ・ハッダード עזרא חדר / عزרא חדר (1903 年生-1972 年没) など主な寄稿者の大半は、ユダヤ教の伝統に基づいた宗教教育を受けた後アリアンスで世俗教育を受けたという共通点を持つ。

『ミスバーフ』第一号は巻頭でその目的を、個人の啓蒙を通じた社会全体の発展に貢献することと定め、同時にそれはイラクの他の文人たちとの連帯の上でなされるべきだと主張している。これに対し『ミスバーフ』の意義をめぐる従来の研究は、序論で述べたような二つの相反する歴史叙述の影響を如実に反映している。具体的には、「ユダヤ」的側面に重点を置く研究が「ユダヤ・コミュニティによる、過激なアラブ民族主義者に対する表現手段」や「シオニスト的」であったと定義する一方、「アラブ」的側面を捉える研究では「アラブ文化の展望を共有する場」とされてきた。これら二つの相反する研究の傾向を糸口として本論文は、その二つの側面の検討に加え、それらがどのように相互に関係したのかをという点にも着目する。

第 3 章 ヘブライ文化の萌芽—「シオンへの思慕」と「シオニズム」の接近

第 3 章では 20 世紀初頭イラクにおいて「ユダヤであること」がどのような変遷を経たのかという点を整理し、『ミスバーフ』におけるその表出を分析した。従来イラクにおいて「ユダヤであること」は、ユダヤ教という宗教を主軸とする「ユダヤ教徒であること」と概ね同義であったが、20 世紀に入りより民族的意味合いの強い「ユダヤ人」意識が喚起され、加えてシオニズムとの接触を通して「シオニスト」という概念が持ち込まれる。

1920 年代は、イラクのユダヤ・コミュニティとパレスチナ／エレツ・イスラエルの関係性が質的变化を遂げる転換期であった。ユダヤ教の宗教的な寄付金の集金を担う「ラビ使節」の定期的な往来に代わり、「シオニスト使節」が行き来するようになったのである。当時イラクを訪れた「シオニスト使節」のうち特に影響力を持った人物に、アラビア語話者でエルサレム出身のスファラディー系ユダヤ人アリエル・ベン・ツィヨン אריאל בן ציון (1880 年生-1932 年没) がいるが、ヨーロッパ出身ユダヤ人が主導する近代化、世俗化を過度に推進するシオニズムに対し、「東洋 (the East)」を強調することで抵抗の姿勢を示した人物でもあった。バグダードを訪れたベン・ツィオンは、1920 年代初頭にイラクにおける初のシオニスト組織として設立された「メソポタミア・シオニスト協会 / الجمعية الصهيونية لبلاد الرافدين / الجمعية الأدبية الاسرائيلية / האגודה הספרותית / האגודה הציונית לארם נהריים והעברית」と接触した。「ユダヤ文学協会」は、ユダヤ啓蒙主義運動ハスカラ ההשכלה の興隆に伴う文学・文化復興の影響下にあったヨーロッパのユダヤ系新聞・雑誌を取り揃えた図書室を併設し、ヘブライ語とその文学・文化の普及を目的としていたが、1921 年に創刊したヘブライ語／ユダヤ・アラビア語併記の機関誌『イエシュルン ישרון』は短命で、その活動は定着しなかった。なお『ミスバーフ』創刊者のシーナは、当時この「ユダヤ文学協会」の書記を務めていた。

こうした背景を踏まえ第 3 章では、「ユダヤ」意識の発露を反映したと考えられる記事の

中にでも特に掲載頻度の高いトピックを中心に分析した。まず、従来の研究が『ミスバーフ』を「対抗言説を提示するためのユダヤ・コミュニティの表現手段」と評価する際言及する反ユダヤ主義的言説への反論記事群があるが、激しく糾弾をする一方、その矛先は主に特定の人物に向けられておりイラク全体を一様に批判するものではない。また、1920年代以降のパレスチナ／エレッツ・イスラエルとの関係性を象徴するニュースとして1925年ヘブライ大学創立に関するものがある。『ミスバーフ』は特集を組み創立を祝福するが、記事の内容の多くはユダヤ系他紙からの引用で、表面的な情報の報告に限られている上に、シオニズムではなくユダヤ民族の歴史と偉業を称える文言が大半である。

これら二つに加え特に1925年以降に増加するのが、イラクのユダヤ・コミュニティ内部の諸制度、組織、及び運営方針に関する記事である。このトピックは、短命に終わった『イェシュルン』でも頻繁に言及されていることから、コミュニティ内での関心が特に高かったことが伺える。また運動としてのシオニズムへの言及は、ヘブライ大学関連の記事群ではなく、このコミュニティ内部に関する記事群において最も頻繁に見られる。統治者への服従と周辺社会への適応を最優先しマイノリティとしての立場を維持するという、数世紀にわたり貫かれてきたユダヤ・コミュニティとその周辺との関係性は、1920年代のイラクにおいて本質的な変化を求められていた。イスラームという宗教権威との相対的な関係においてこそ宗教コミュニティとしての外殻を保っていたユダヤ・コミュニティにとって、英国委任統治政府及びイラク政府という宗教的要素を有しない統治機構に対応することはコミュニティの性質を根本的に定義し直すことであったが、「シオニズム」との接触は、それをどう理解し受容するかという問題も含め、コミュニティ内部における分裂と対立をさらに深める主な要因となったのである。

第4章 アラブ文化復興運動ナフダとイラクへの期待

「ユダヤ」的側面を検討した第3章に対し第4章では、1920年代イラクのユダヤ・コミュニティにおいて「アラブ」、「イラク」という自己認識はどういった文脈で醸成され共有されたのかという点を明示し、『ミスバーフ』におけるその表象を分析した。この時期以前、ユダヤ・コミュニティでは、行政言語としてオスマン語、宗教生活ではヘブライ語、話し言葉としてユダヤ・アラビア語が用いられ、「アラブ」を自称することもアラビア語を書き言葉として用いることもほとんどなかった。しかしクルアーンの言語としてのアラビア語とイスラーム的過去の世俗化や、19世紀エジプトに端を発するアラブ文化復興運動ナフダ النهضة（アラビア語で「覚醒」の意）の興隆を背景に、一部のユダヤ人に「アラブ化」と呼ぶべき動きが起きた。アリアンスなどユダヤ系学校で、イラク社会に参入する一道具としてのアラビア語教育が行われたことは、後にユダヤ人の自己表現の手段としてのアラビア語とその文化の地位が確立することに繋がる。『ミスバーフ』はこうしたユダヤ・コミュニティにおけるアラビア語の役割の変化の産物であり、ハスカラの影響下にあったユダヤ系雑誌・新聞や教育機関との接触で得た動機をナフダの文脈でアラビア語を用いて実践した結果であるともいえる。

第4章では、『ミスバーフ』において「アラブ」、「イラク」意識を反映したと考えられる記事の中でも特に掲載頻度の高いトピックを中心に分析した。第3章で言及したハスカラ

と同様に、ナフダにおいても定期刊行物が重要な役割を果たしていた。『ミスバーフ』には創刊当初よりナフダの担い手を自負する記事が多い。特に、「東洋 (الشرق)」を深い眠りから覚醒させよと鼓舞する、同世代の若者に向けた文言が頻繁に見られる。また、イラク国内外のアラビア語他誌の購読勧誘広告や創刊に寄せた祝辞の掲載に加え非ユダヤ系知識人からの寄稿記事も多く見られることから、『ミスバーフ』の「覚醒」への呼びかけは一方面的なものではなく、イラクの知識人らとの繋がりの上でなされていたと考えられる。第3章で触れたヘブライ大学に対し、ナフダ期のアラブ世界ではレバノンのバイルート・アメリカン大学が重要な位置を占めており、当時イラクのユダヤ人も一定数留学していた。『ミスバーフ』には一イラク出身ユダヤ人留学生による一連の記事がある。彼はバイルート・アメリカン大学留学中にパレスチナ/エレッツ・イスラエルへ旅しヘブライ大学を訪れ、その洗練された様子に感銘を受ける一方、その関心は常に同様の発展をイラクで成し遂げることに向けられている。

『ミスバーフ』は新しいアラブ文学の実践の場でもあり、ユダヤ系、非ユダヤ系問わず寄稿があった。伝統的なアラブ文学では詩文学が主流である。しかし西洋文学との邂逅は、古典の伝統を継ぐ自由詩、イラクの社会問題を取り上げる短編小説、そして公共空間の変化を象徴する演劇といった新たなジャンルをもたらした。『ミスバーフ』に表れる文学作品もこの3つに特徴付けられる。アラブ文学・文化に関する記事の中でも、アラビア語書籍を所蔵する図書室の宣伝や講義、演劇上演に関する記事に、第3章で述べた「ユダヤ文学協会」への言及が度々見られる。理由としてシーナが書記を務めていたことが挙げられるが、同時に、1920年代イラクで「ユダヤ文学協会」がヘブライ語とその文学・文化を普及する対象とした層と、『ミスバーフ』がアラブ文学・文化を共有しようとした層が、ある程度重複していたことを示唆している。そしてこのことは、『ミスバーフ』および「ユダヤ文学協会」の活動に関心を示す層にとっては、とりわけ文学・文化という側面において言えばヘブライ語とその文学・文化およびアラビア語とその文学・文化は矛盾なく併存しうるものであり、演劇の例に象徴されるように新たなジャンルの発展に貢献する可能性を有した、ある種の相補的な関係にあったとすることもできる。

結 『ミスバーフ』廃刊と1930年代の幕開け

以上本論文では、イスラエル建国後の現実においては相反する要素である「ユダヤ」と「アラブ」、「イラク」が、1920年代のイラクにおいては時に相補的な関係を保っていたこと、また当時ユダヤ・コミュニティに見られたアイデンティティ表象の流動性や開放性は、「ユダヤ」及び「アラブ」、「イラク」というアイデンティティの明確な定義が成立していなかったことに起因することを指摘した。

第3章で取り上げたユダヤ・コミュニティ内部の制度をめぐる議論は、イラクにおけるユダヤ・コミュニティの方向性が過渡期にあったことを示唆している。本論文は、当時のユダヤ人による「アラブ人」、「イラク人」という自己認識の表出は、こうしたユダヤ・コミュニティ内部の動きと密接に連動していたと結論づける。事実、パレスチナ/エレッツ・イスラエルにおける政治的緊張が高まる1930年代以降、イラクのユダヤ・コミュニティはその立場と忠誠心の向かう先を表明する必要に迫られ、その結果『ミスバーフ』に見られ

るような「ユダヤ」と「アラブ」双方への連帯を表明することは憚られるようになった。また本論文は、第4章で取り上げた『ミスバーフ』におけるハスカラとナフダ二つの文化復興の接点は、「ユダヤ」と「アラブ」どちらの文脈においても西洋との相対的關係を通して立ち現れる「東洋」を自称するしかなかったイラクのユダヤ・コミュニティの両面価値性が、とりわけ文学・文化の領域において相補的に作用したことを示していると結論づける。